

2022 年日本独文学会秋期研究発表会を終えて (M. Shimizu) [J]

北海道支部で全国学会の開催をお引き受けするのは、個人的には4度目になります。過去の3回は、いずれも連続して北海道大学の担当でした。それ以前も同様だったと聞いています。同一の大学が全国学会を毎回、担当するのは、地方支部としてほとんど例がないようです。これには北海道という特殊事情も関係していますが、首都圏の大学も似たような負担を負っているとはいえ、こうした慣行はいかかなものかという声は、関係教員の数が減り続ける中で、次第に高くなっていきました。そして、今回、4度目の大役かと内々に案じていたところ、北海道ドイツ文学会幹事会の皆様が中心となって、北海道地区担当のオンライン開催ということに落ち着きました。実施に当たられた諸先生のご努力に対して、改めて謝意を申し上げます。

今春、やっと実現した対面学会とは異なって、国立大学では感染状況への危惧が大きく、前幹事会からの引継ぎの時点では、秋の対面開催は困難との予測が支配的な状況にありました。事実、私が所属している他の諸学会でも、今秋の現地での大会実施は最初から蚊帳の外とされるか、期日が近づくにつれて、次第に予定を変更してオンライン開催に切り替わった例がほとんどでした。春の立教大学での大会では研究発表をさせていただきましたが、それは本当に久々のことで、感染の蔓延以来、札幌の地を一步も出たことがなく、出張手続きの方法も忘れかけていた始末でした。それだけに、会場で旧来の知人から何度も声をかけられたことが非常に嬉しく、やはり対面形式での研究発表会には、何にも替えがたい価値があると実感した次第です。

振り返ってみますと、地方開催の全国大会への参加は、もう40年近く前にさかのぼる金沢大会が初めてでした。羽田空港を発って当地を訪れましたが、それが飛行機に乗った最初の体験だったのです。当時、金沢大学のキャンパスは移転前の市の中心部にあり、空き時間に兼六園に足を運んで感激したことを覚えています。閉会の挨拶では、残りの半日で回れる手近な観光地の紹介にも触れられていました。

首都圏での春期研究発表会には、東京の大学に通っていた関係で、院生の先輩方に混じって受付のアルバイトを仰せつかるなど、それなりに接点はありました。しかし、金沢での秋期研究発表会に参列できたのは、その年の春に助手に採用され、旅費が支給されたおかげでした。やがて北大に赴任することになり、院生の多くが全国大会への参加経験がないことを知って、遠隔地の大学の厳しい実情を痛感しました。

その後、法人化された国立大学では、高額の会場使用料を要求されるようになりました。北大大会は以前、正門横の格調高い学術交流会館で行われたことがあります。しかし、今は入試の仕事で入館を許されるのみで、経済的余裕のある理系の学会などに利用が限られているようです。深刻な財政難を抱えた独文学会にとって、研究発表会の費用捻出は懸案の一つともうかがっています。北大のように交通の利便性がすこぶる高く、それに比例して並の教室使用料も群を抜く国立大学の場合には、なおさらのことでしょう。

それだけに、最近の相次ぐオンライン学会には寂しさも感じつつ、地方大学に所属する者として、それなりのメリットも捨てがたいと考えています。今回、他の支部学会のいくつかと同様に大きな懸念だったマンパワー不足の問題がかなり解消されたのは、担当地区の実情に鑑みて、やはりありがたいことでした。なお、懇親会についてですが、今回、やはりオンラインの形式を取ることになりました。赤字の心配をよそに、観光バスを何台も繰り出して、サッポロビール園へと凱旋したかつての豪華饗宴とは遙かに比肩しがたく、往時を知る会員諸氏の皆様の忸怩たる思いの前には、只の一言もございません。それでも、今回の懇親会では、個人間のプライベートなやりとりも可能になっていました。全員に筒抜け丸聞こえという不安なく、気楽に親交を深めることができたのです。ご挨拶の大役を承った折には、シラケ鳥が鳴くのではと気を揉んでいましたが、それは杞憂にすぎませんでした。ただ、自宅のPCが古く、通信事情も悪かったためか、なかなかマイクが繋がらず、参加者の皆様にはご迷惑をかけてしまいました。改めてお詫び申し上げます。

また、上記の旅費の問題にしても、オンライン学会には、将来を担う若手研究者はもちろんのこと、専任教員にとっても恩恵が少なくありません。予算の減額が続く北大のような遠隔地大学にあっては、学会出張は年に1~2回がやっとです。そもそも単独の学会にしか所属していない会員は、あまりおられないのではないのでしょうか。独文学会のみにも年2回の出張機会を当てる贅沢は、高嶺の花と言わざるを得ません。恥ずかしながら、これまで年2度の地方学会と合わせて、年4回の独文学会関係の催しすべてで末席を汚したためしはありません。ちなみに、最近では、定職に就こうとする際の熾烈な公募の関門においても、ドイツ語学文学以外の専門家が大半を占める選考委員会に審査を委ねるケースが増えてきました。独文学会はもはや独自のマーケットを占有していないかのようです。学生には、ドイツ語以外の言語を専門とする人たちにも評価される努力を傾けるよう、日頃から注意を促しています。明治以来の威信言語別の伝統的区分けを最後まで死守し続けてきた語学文学部門ですが、変革の波は足下まで押し寄せている印象を受けます。

さて、以上の利点も見逃せないオンライン方式ですが、別の面で懸念もあります。コロナ禍後の時代を迎えても、大学でのオンライン授業には引き続き一定数の単位確保を認める方針が固められたらしいという噂を耳にしました。「あっ、人減らしですね」と思わず漏らした同僚のつぶやきが耳を離れません。目下のところ、大学間や海外の機関との共同授業などが謳われているようですが、今や限界にまで切り詰められた専任スタッフに代わって、常勤以外の多数の講師陣に支えられ、少人数教育ゆえに経済効率の低い外国語科目が標的になるのでしょうか。

感染蔓延の少し前、科研費による出張で久しぶりにオランダ・フローニンゲン大学を訪れた時のことです。日本学科の教授と歓談していた際に、「おもしろい講演があります」と案内のチラシを渡されました—— *Bevolgingskrimp in Japan* 「日本の人口減少」。2100年には、日本の人口は5千万人になるのだそうです。自治体の約半数は存続の危機に瀕するとのことでした。お客さんが減れば、その分、店を閉じる必要が出てきます。事務処理はAI、老

人介護はロボットの活用でいくらかしのげたとしても、アトム君やウランちゃんの後裔たちを学校に通わせるわけにはいきません。ゲルマニスティクだけではないのですね。見届けることは遠くかなわず、要らぬ老婆心とは知りつつも、次世代、次々世代の学芸の行方は、はたしてどこへと向かうのでしょうか。

清水 誠 (北海道大学)

0189

作成日 : 2022/10/15